

氏 名：北園 真希

学位の種類：博士（看護学）

学位記番号：甲第182号

学位授与年月日：2020年3月10日

学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当

論文審査委員：主査 森 明子（聖路加国際大学教授）

副査 堀内 成子（聖路加国際大学教授）

副査 八重 ゆかり（聖路加国際大学准教授）

副査 井上 みゆき（和歌山県立医科大学大学院保健学研究科教授）

論文題目：胎児異常を診断された女性を支えるバース&ペアレンティング・プランニング・プログラムの開発と評価

#### 博士論文審査結果

元気な赤ちゃんを産みたいという望みは女性の一般的な願いであり、胎児異常の診断を受けた女性は出産を前に一気に不安や孤独、無力感、喪失感などにみまわれる。本論文は、胎児異常を診断された妊婦に対して、バース&ペアレンティング・プランニング・プログラムを開発し、プログラムを受けた群(介入群)は、通常ケア群(対照群)に比べて 1)希望を記述したバースプラン文書を提出する人の割合が高い、2) 希望の表明と共有ができたという認識での介入前後の差が大きい、3) 周囲からの支援(ソーシャルサポート)が十分であるかに関する女性の主観的認識が高い、4)ケアに対する満足度が高い、5)質問紙自由記述欄に肯定的記述が多い、という効果があるかについて、一周産期総合医療センターにおける準実験研究デザインで評価した。介入プログラムは、出産後に看取りが想定される胎児異常に限定せず全ての胎児異常に拡大して適用する、分娩のための入院時ではなく、妊娠 22 週以降の早期に導入する、助産師と妊婦がプランニングについて話し合う、介入ツール(冊子)を使用するという点が通常ケアと異なっていた。結果は、自身の希望を記述したバースプラン文書を提出する人の割合が介入群で高く、希望の表明と医療者との共有認識が産前産後の変化量において介入群が高かった。ケアに対する満足度は助産師・看護師による支援を介入群は十分に得られたと認識していた。ポジティブサポートととらえた自由記述が介入群に多くみられた。ソーシャルサポート認識は 2 群間に差はなかった。

審査での主な指摘事項は、①通常ケアの記述が不十分で介入プログラムとの違いが不明瞭である ②介入プログラムでバースプラン導入適用対象を拡大した結果、バースプラン提出割合が高くなるのは当然と考えられ、この観点からすると、バースプラン提出割合をプログラムのプライマリ・アウトカムとしたことは不適切であった ③本研究での介入プログ

ラムに含まれるケア介入の効果を評価するためには、通常ケア群との比較ではなく、通常ケアを同じ対象に提供した群との比較が必要であった ④サンプルサイズ計算の論拠(参考にした過去の研究)が不適切である ⑤層別解析手法において適切な層化が行われていない ⑥質的データ分析結果に対する信頼性・妥当性が検討されていない ⑦「面接」や希望表明の「機会」「補完ツール」など介入プログラムを記述・説明する用語が不適当である、であった。

指摘事項の中には、計画段階の問題とされ今後の研究計画上の工夫課題となるものもあったが、必要な再分析は行い、現段階で可能な限り丁寧に再検討し、修正加筆がなされた。本論文は、介入評価の研究結果として弱みはあるものの、妊婦が胎児異常という現実を喪失・悲しみではなく、子どもとの出会いに希望を持ち、その希望を表明し具現化に向けて医療者と共有することを支援するという点で、グリーフケアとはまた異なる次元の新たなケアのレパトリーを看護・助産実践にもたらす強みがあるとして高く評価できる研究であると判断された。

以上により、本論文は、本学学位規程第 5 条に定める博士(看護学)の学位を授与することに値するものであり、申請者は看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査ならびに最終試験に合格と判定する。